「坊ちゃん」のモデルと熊谷

くまがい探偵団　米山　實

漱石の傑作「坊ちゃん」のモデル弘中又一が熊谷中学（現熊高）の数学教師として十九年間も熊谷に住んでいたことを知るひとは意外にすくない。

漱石は明治二八年四月一〇日から、又一は五月二七日から愛媛県立松山中学校（現松山高校）に赴任して職員室で向かい合わせに座り、気心の通じ合った同僚になった。時に漱石二八歳、又一二一歳。
英語も出来た又一は漱石に頼まれて下級生に英語も教えたという。

翌年の四月、漱石は熊本第五高校へ、又一は愛媛県内の新設校へそれぞれ転任する。分かれに際して漱石は又一に「一切空　かげろふとでも　なり給へ」というとぼけた句を送っている。
二人の松山中学在任期間は一年にも満たない短いものだったが、二人は生徒たちに強烈な印象を与えた。
又一がしっぽくを四杯も平らげたこと。漱石がいつもいかめしい顔をしていたため鬼瓦というあだ名を付けられたことは生徒の作った数え歌で、今に伝えられている。
「一つ、又中シッポクさん　七つ、夏目の鬼瓦」

明治三三年、又一は我が熊谷にやってくる。同じ年、漱石はロンドンへ留学する。

熊谷での又一を紹介する前に、彼の出自等を簡単に記す。
弘中又一は、明治六年、山口県湯野村（現周南市）に生まれ、同志社に学び数学、英語、漢学の中等検定試験に合格している。
学友らが書き残した文章などからみると学生時代の又一は無類の努力家、勉強家で奇才、天才とまでいわれていたようで、無鉄砲な「坊っちゃん」のイメージとはまったく違った人物だったようだ。

熊谷に赴任してきた又一は、きわめて優秀で有能な教育者の面と「坊っちゃん」のモデルらしい剽軽な面とを併せ持っていた。又一の熊谷時代をいきいきと伝える唯一の貴重な資料「熊高八十年誌」から、教え子の証言をいくつか紹介しよう。
・代数の最初の授業で、「スミスの原書でやりましょうか」と言って生徒の度肝

を抜く茶目っ気があった。
・博識で、数学は勿論、英語の何ページに何が書かれているかまで知っていた。
・物理・化学の先生が授業で適切な説明をしてくれない時、生徒が黒板にその間違いを書いておくとよろこんで教えてくれた。漢文でも歴史でも何でも訊ねけばわかりやすく教えてくれた。
・月給をもらうと忘れないようにと靴下の中に入れた。
・学校の帰り、道端にどじょう売りがいたので買う気になったが入れ物はと訊かれて、かぶっていた山高帽に入れてもらった。
・同僚の先生たちにも人気があり、昼食時には職員室備え付けの大火鉢を囲んで談論風発しながら食事するのを同僚は楽しみにしていた。
・熊谷で陸軍の演習があった時、又一は大砲の着弾距離について相談を受けたが、演習の結果は又一の出した答えと寸分違わなかったので関係者一同驚嘆した。

大正八年、又一は十九年間暮らした熊谷をあとにする。母校同志社の中学から数学主任として迎えられたのだ。
昭和十一年、又一は熊中同窓会誌の依頼で「在熊谷十九年」という文を寄稿する。軽妙洒脱な文章で熊谷時代を振り返ったあと、「思えば熊谷の十九年は僕の生涯の最も愉快な十九年であった」と書いている。

これほど熊谷と深い関係があった弘中又一を我が熊谷は忘れようとしている。
今、又一と熊谷の関係を示すものはわずかにさいたま地方裁判所熊谷支部前の明石医院のブロック塀から吊り下げられた「漱石の坊ちゃん先生旧居跡」という汚れた説明板一点のみである。

（熊谷市公連だより　第 15 号　平成 25 年より）